

自殺許容に関する調査報告

—— 一般的信頼、宗教観・死生観との関係

山本功／堀江宗正

一 調査概要

本調査は、人々の自殺に対する許容度を測定し、そうした態度を規定する諸要因との関連を分析するために実施されたものである。実査はインターネット上で行われた¹⁾。

総務省「平成二四年通信利用動向調査」によれば、インターネット利用率は世代によって異なっている。二〇代から四〇代では90%を超すが、五〇代で85・4%、六〇〜六四歳では71・8%、六五〜六九歳62・7%、七〇〜七九歳48・7%と世代が上がるにつれて利用率が減じていく傾向にある（総務省『平成二五年版 情報通信白書』：332）。したがって、ネット調査では一定以上の年齢では代表性が大きく損なわれることが明らかであるため、二〇歳〜五九歳までを調査対象とすることとした。このことは、日本社会全体を母集団としていないということであり、とりわけ高齢者が対象者に含まれていないことに留意する必要がある。

表 1-1 総務省統計局による補間補正人口 (単位：万人)

年齢	男女計	男	女
20～24	618	317	301
25～29	682	348	334
30～34	756	384	372
35～39	893	453	440
40～44	971	491	480
45～49	848	427	422
50～54	772	386	385
55～59	771	383	388

(出典：総務省統計局「人口推計 平成 26 年 2 月報」)

表 1-2 20～59 歳の年齢 5 歳階級別かつ性別の構成比 (%)

年齢	男女計	男	女
20～24	9.8 %	5.0 %	4.8 %
25～29	10.8 %	5.5 %	5.3 %
30～34	12.0 %	6.1 %	5.9 %
35～39	14.1 %	7.2 %	7.0 %
40～44	15.4 %	7.8 %	7.6 %
45～49	13.4 %	6.8 %	6.7 %
50～54	12.2 %	6.1 %	6.1 %
55～59	12.2 %	6.1 %	6.1 %

二〇一四年二月一日現在における総務省統計局による補間補正人口を参照した。これは、二〇一〇年の国勢調査にもとづく人口を基準とした概算値である。これを表 1-1 に示す。

表 1-1 の全セルの計を 100 % とした場合の各セルの構成比を表 1-2 に示した。

合計 1,000 人を目標サンプル数とし、表 1-1 の年齢 5 歳階級別かつ性別の比率にしたがってサンプル数を割り当てた。割り当て数を表 1-3 に示す。

表 1-3 サンプル割り当て数 (単位:人)

年齢	男女計	男	女
20～24	98	50	48
25～29	108	55	53
30～34	120	61	59
35～39	141	72	70
40～44	154	78	76
45～49	134	68	67
50～54	122	61	61
55～59	122	61	61
合計	1000	505	495

表 1-4 回収サンプル数 (人)

年齢	男女計	男	女
20～24	102	52	50
25～29	112	57	55
30～34	124	63	61
35～39	148	75	73
40～44	160	81	79
45～49	140	70	70
50～54	126	63	63
55～59	126	63	63
合計	1038	524	514

表 1-3 の割り付けにもとづいて、株式会社マクロミルにネット調査を発注した。通常の同社の調査では「調査・広告」従業員は調査対象者から除外されるが、業種による除外を一切せずに実査を行うこととした。調査開始日時は二〇一四年三月一三日(木) 二二時三六分、調査終了日時は二〇一四年三月一五日(土) 一〇時〇〇分であった。

回収サンプル数と年齢五歳階級別かつ性別の比率は以下の表 1-4、表 1-5 のとおりである。

株式会社マクロミルは、無効となるサンプルが発生することを見越し、発注数の 103% 以上の納品をすること

表 1-5 回収サンプルの年齢五歳階級別かつ性別の構成比(%)

年齢	男女計	男	女
20～24	9.8%	5.0%	4.8%
25～29	10.8%	5.5%	5.3%
30～34	11.9%	6.1%	5.9%
35～39	14.3%	7.2%	7.0%
40～44	15.4%	7.8%	7.6%
45～49	13.5%	6.7%	6.7%
50～54	12.1%	6.1%	6.1%
55～59	12.1%	6.1%	6.1%
合計	100.0%	50.5%	49.5%

となつてゐるため、発注サンプル数よりも回収数の方が多くなつてゐる。データチェックの結果、とくに無効とすべきサンプルはなく、表1-2の構成比と表1-5の構成比に大きな隔たりはみられないため、すべてのサンプルをそのまま分析対象とすることとした。(山本功)

二 一般的信頼と自殺許容

この章では、一般的信頼と自殺許容との関連を分析する。

1 一般的信頼尺度の構成

山岸(1998:92)による一般的信頼尺度六項目のうち五項目を用いた一般的信頼尺度を構成した。回答は「とてもそう思う」「ややそう思う」「あまりそう思わない」「全くそう思わない」の四件法である。設問を以下に示す。「ほとんどの人は信頼できる」「ほとんどの人は基本的に正直である」「ほとんどの人は他人を信頼している」「たいいていの人は、人から信頼された場合、同じようにその相手を信頼する」「ほとんどの人は基本的に善良で親切である」。信頼性係数は $r=0.88$ となつた。

表 2-1 一般的信頼の高低 2 群と自殺許容のクロス集計結果

		そう思う	そう思わない	χ^2 値	p 値
病気を苦にした自殺は理解できる	低信頼群 (n=543)	62.4%	37.6%	0.366	0.545
	高信頼群 (n=495)	64.2%	35.8%		
どうしようもない困難にあった人は、自殺をしてもやむをえないときもある	低信頼群 (n=543)	47.9%	52.1%	1.538	0.215
	高信頼群 (n=495)	44.0%	56.0%		
責任をとって自殺することは仕方がない	低信頼群 (n=543)	15.5%	84.5%	0.105	0.746
	高信頼群 (n=495)	14.7%	85.3%		
生死は最終的に本人の判断に任せるべきである	低信頼群 (n=543)	70.9%	29.1%	0.047	0.828
	高信頼群 (n=495)	71.5%	28.5%		
自殺は絶対すべきではない	低信頼群 (n=543)	60.8%	39.2%	34.931	0.000 ***
	高信頼群 (n=495)	77.8%	22.2%		

*** $p < 0.001$ ** $p < 0.01$ * $p < 0.05$ † $p < 0.1$

得点を逆転させ、「とてもそう思う」の四点から「全くそう思わない」の一点までの総和を算出し、一般的信頼尺度とした。Z = 1036、レンジは 5 ~ 20、平均 12.22 ± 2.81、歪度 0.41、尖度 0.12 となった。

中央値が二点であったため、五点 ~ 二点を低信頼群とし、一三点以上を高信頼群とした二群を独立変数として、自殺許容との関連を分析していく。

自殺許容に関しては、強い肯定と弱い肯定、強い否定と弱い否定をそれぞれ統合し、二値化して分析に用いた。

2 一般的信頼と自殺許容とのクロス集計分析

一般的信頼の高低二群と自殺許容を測定する五項目それぞれとをクロス集計し、カイ二乗検定を行った。その結果を表 2-1 に示した。

表からみてとれるように、「病気を苦にした自殺は理解できる」「どうしようもない困難にあった人は、自殺をしてもやむをえない」「責任をとって自殺することは仕方がない」「生死は最終的に本人の

表 2-2 性別にみた一般的信頼と「自殺は絶対すべきではない」のクロス集計結果

		そう思う	そう思わない	χ^2 値	p 値	
男 性	低信頼群 (n=293)	57.0 %	43.0 %	10.880	0.001	**
	高信頼群 (n=231)	71.0 %	29.0 %			
女 性	低信頼群 (n=250)	65.2 %	34.8 %	23.289	0.000	***
	高信頼群 (n=264)	83.7 %	16.3 %			

*** $p < 0.001$ ** $p < 0.01$ * $p < 0.05$ † $p < 0.1$

判断に任せるべきである」の四項目とは、関連がみられなかった。

だが、「自殺は絶対すべきではない」という項目では、肯定的回答が低信頼群 60・8%、高信頼群 77・8%と、高信頼群の方が 17・0 ポイント高い。カイ二乗検定では 0・1%水準で有意な差であった。そこで以下では、この項目に関して、年齢と性別を投入した分析を行っていく。

3 性別・年齢別の一般的信頼と「自殺は絶対すべきではない」の分析

表 2-2 は、性別に、一般的信頼の高低二群と「自殺は絶対すべきではない」とのクロス集計した結果である。男女ともに、高信頼群の方が「自殺は絶対すべきではない」という回答が多かった。男性は 1%水準で、女性は 0・1%水準で有意な差であった。

表 2-3 は、一〇歳刻みの年代別に、一般的信頼の高低二群と「自殺は絶対すべきではない」とをクロス集計した結果である。すべての年代において、高信頼群の方が「自殺は絶対すべきではない」という回答が多かった。二〇代は 0・1%水準、三〇代と四〇代は 5%水準、五〇代は 1%水準で有意な差であった。

表 2-4 は、性別かつ一〇歳刻みの年代別に、一般的信頼の高低二群と「自殺は絶対すべきではない」とをクロス集計した結果である。すべての性別かつ年代別において、高信頼群の方が「自殺は絶対すべきではない」とい

表 2-3 年代別にみた一般的信頼と「自殺は絶対すべきではない」のクロス集計結果

		そう思う	そう思わない	χ^2 値	p 値	
20 代	低信頼群 (n=131)	48.1 %	51.9 %	13.454	0.000	***
	高信頼群 (n=83)	73.5 %	26.5 %			
30 代	低信頼群 (n=156)	66.0 %	34.0 %	6.613	0.010	*
	高信頼群 (n=116)	80.2 %	19.8 %			
40 代	低信頼群 (n=148)	63.5 %	36.5 %	5.852	0.016	*
	高信頼群 (n=152)	76.3 %	23.7 %			
50 代	低信頼群 (n=108)	64.8 %	35.2 %	7.158	0.007	**
	高信頼群 (n=144)	79.9 %	20.1 %			

*** $p < 0.001$ ** $p < 0.01$ * $p < 0.05$ † $p < 0.1$

表 2-4 性別・年代別にみた一般的信頼と「自殺は絶対すべきではない」のクロス集計結果

		そう思う	そう思わない	χ^2 値	p 値	
20 代男性	低信頼群 (n=69)	44.9 %	55.1 %	4.089	0.043	*
	高信頼群 (n=40)	65.0 %	35.0 %			
20 代女性	低信頼群 (n=62)	51.6 %	48.4 %	9.752	0.002	**
	高信頼群 (n=43)	81.4 %	18.6 %			
30 代男性	低信頼群 (n=85)	63.5 %	36.5 %	0.980	0.322	
	高信頼群 (n=53)	71.7 %	28.3 %			
30 代女性	低信頼群 (n=71)	69.0 %	31.0 %	6.425	0.011	*
	高信頼群 (n=63)	87.3 %	12.7 %			
40 代男性	低信頼群 (n=79)	62.0 %	38.0 %	1.307	0.253	
	高信頼群 (n=72)	70.8 %	29.2 %			
40 代女性	低信頼群 (n=69)	65.2 %	34.8 %	4.928	0.026	*
	高信頼群 (n=80)	81.3 %	18.8 %			
50 代男性	低信頼群 (n=60)	55.0 %	45.0 %	5.121	0.024	*
	高信頼群 (n=66)	74.2 %	25.8 %			
50 代女性	低信頼群 (n=48)	77.1 %	22.9 %	1.130	0.288	
	高信頼群 (n=78)	84.6 %	15.4 %			

*** $p < 0.001$ ** $p < 0.01$ * $p < 0.05$ † $p < 0.1$

う、回答が多かった。

有意な差が検出されたのは以下のとおりである。二〇代男性5%水準、二〇代女性1%水準、三〇代女性5%水準、四〇代女性5%水準、五〇代男性5%水準での有意差があった。

性別かつ年代別に分析すると、各群のサンプルサイズが小さくなるため、カイ二乗検定では有意差が検出されにくくなる。そのため、有意ではない性・年代もあるが、方向としては同一であった。

以上の分析をまとめると、一般的信頼の高い回答者は、自殺を許容しない傾向にあると言えよう。少なくとも、性別での分析、年代別での分析では有意にこうした仮説が支持された。性別かつ年代別の分析ではサンプルサイズの問題もあり、有意な性・年代と有意差のない性・年代の両者がみられたが、方向としては同一であった。

心理学や社会学など、様々な領域で注目されてきた「信頼」が、人々の自殺許容態度に対して負の効果がありそうだという知見は、自殺対策の一助となる可能性があるように思われる。まずはこの報告書をもって第一報としたい。(山本功)

三 自殺許容度の分析

この章では、自殺許容度の基礎的分析を行う。

1 自殺許容度の測定

本調査では、五項目の設問で「自殺許容度」を測定した。なお、項目の選定にあたっては、内閣府自殺

表 3-1 自殺許容度を測定する各項目の単純集計結果

	とても そう思う	やや そう思う	あまりそう 思わない	全くそう 思わない	人数 (人)
病気を苦にした自殺は理解できる	8.6 %	54.7 %	28.1 %	8.6 %	1038
どうしようもない困難にあった人は、 自殺をしてもやむをえないときもある	7.4 %	38.6 %	39.1 %	14.8 %	1038
責任をとって自殺することは仕方がない	1.9 %	13.2 %	43.9 %	40.9 %	1038
生死は最終的に本人の判断に任せる べきである	20.3 %	50.9 %	22.2 %	6.6 %	1038
自殺は絶対すべきではない	32.6 %	36.3 %	25.6 %	5.5 %	1038

対策推進室「自殺対策に関する意識調査」（二〇一二年一月、二〇〇八年二～三月）を参照した。この章では、性別、年代別の分析を行い記述していく。各項目の回答分布を表 3-1 に示した。

「病気を苦にした自殺は理解できる」という項目では、54・7%と半分以上が「ややそう思う」という弱い肯定の回答となっている。「あまりそう思わない」という回答が28・1%とそれに続き、強い肯定、強い否定はともに8・6%と一割未満であった。

「どうしようもない困難にあった人は、自殺をしてもやむをえないときもある」という設問では、「ややそう思う」38・6%、「あまりそう思わない」39・1%と弱い肯定と弱い否定がほぼ同水準であった。「全くそう思わない」という強い肯定が14・8%となっており、「とてもそう思う」という強い肯定7・4%の二倍となっている。

「責任をとって自殺することは仕方がない」という設問では、「あまりそう思わない」43・9%、「全くそう思わない」40・9%と八割強が否定的な回答となっている。

「生死は最終的に本人の判断に任せるべきである」という設問では、「とてもそう思う」20・3%、「ややそう思う」50・9%と、

表 3-2 性別にみた自殺許容度

		そう思う	そう思わない	合計	χ^2 値	p 値
病気を苦しめた自殺は理解できる	男性 (n=524)	65.6 %	34.4 %	100.0 %	2.524	0.112
	女性 (n=514)	60.9 %	39.1 %	100.0 %		
どうしようもない困難にあった人は、自殺をしてもやむをえないときもある	男性 (n=524)	47.5 %	52.5 %	100.0 %	0.919	0.338
	女性 (n=514)	44.6 %	55.4 %	100.0 %		
責任をとって自殺することは仕方がない	男性 (n=524)	16.4 %	83.6 %	100.0 %	1.365	0.243
	女性 (n=514)	13.8 %	86.2 %	100.0 %		
生死は最終的に本人の判断に任せるべきである	男性 (n=524)	73.9 %	26.1 %	100.0 %	3.652	0.056 †
	女性 (n=514)	68.5 %	31.5 %	100.0 %		
自殺は絶対すべきではない	男性 (n=524)	63.2 %	36.8 %	100.0 %	16.122	0.000 ***
	女性 (n=514)	74.7 %	25.3 %	100.0 %		

*** $p < 0.001$ ** $p < 0.01$ * $p < 0.05$ † $p < 0.1$

七割程度が肯定的な回答であった。

「自殺は絶対すべきではない」という設問では、「とてもそう思う」32・6%、「ややそう思う」36・3%であり、七割弱が肯定的な回答であった。この設問に対し、「あまりそう思わない」25・6%、「全くそう思わない」5・5%となっており、自殺の否定を直接たずねた設問に対し、三割が許容的な回答であったことは特筆すべきであろう。

以上の五項目をみると、「病気」「困難」「責任をとって」といった条件を提示した場合と、原則的な設問とで、回答者の反応が異なることが分かる。概して、何らかの条件下であると、自殺許容度が上昇することが、見てとれる。

2 性別にみた自殺許容度

ついで、性別に自殺許容度を測定する各項目を分析していく。解釈しやすくするために、

強い肯定と弱い肯定、強い否定と弱い否定をそれぞれ統合し、二値化して分析に用いる。

性別にクロス集計した結果を、表 3-12 に提示する。

五項目中二項目において、性別による違いがみられた。

「生死は最終的に本人の判断に任せるべきである」という設問に対し、肯定的な回答が男性 73・9%、女性 68・5% となっており、5・4 ポイント男性の方が高い。カイ二乗検定では、10%水準の有意傾向であった。

「自殺は絶対すべきではない」という項目では、肯定的な回答が男性 63・2%、女性 74・7% となっており、女性の方が 11・5 ポイント高い。0・1%水準で有意な差であった。

統計的検定で有意となったのは一項目、有意傾向が一項目であるが、それ以外の有意差のない項目でも、わずかながら男性の方が自殺を許容する回答が多いことが見てとれる。

3 年代別にみた自殺許容度

ついで、年代別に自殺許容度を測定する各項目を分析していく。前項と同様、回答を二値化して分析に用いた。年代別のクロス集計結果を以下の表 3-13 に示した。

五項目中二項目において有意差が検出された。

「どうしようもない困難にあった人は、自殺をしてもやむをえない」という項目は、肯定的な回答が二〇代 54・2%、三〇代 47・8%、四〇代 42・3%、五〇代 41・7% となっている。年代が低いほど肯定的な回答が多いことが分かる。とりわけ、二〇代では半数以上が肯定的であり、三〇代であっても半数に近い。二〇代と五〇代の差は 12・5 ポイントある。カイ二乗検定の結果、5%水準で有意な差であった。

「自殺は絶対すべきではない」という項目では、三〇代と五〇代は肯定的な回答が七割であるのに対し、

表 3-3 年代別にみた自殺許容度

		そう思う	そう思わない	合計	χ^2 値	p 値	
病気を苦にした自殺は理解できる	20 代 (n=214)	68.2 %	31.8 %	100.0 %	4.086	0.252	
	30 代 (n=272)	64.7 %	35.3 %	100.0 %			
	40 代 (n=300)	60.7 %	39.3 %	100.0 %			
	50 代 (n=252)	60.7 %	39.3 %	100.0 %			
どうしようもない困難にあった人は、自殺をしてもやむをえないときもある	20 代 (n=214)	54.2 %	45.8 %	100.0 %	9.679	0.021	*
	30 代 (n=272)	47.8 %	52.2 %	100.0 %			
	40 代 (n=300)	42.3 %	57.7 %	100.0 %			
	50 代 (n=252)	41.7 %	58.3 %	100.0 %			
責任をとって自殺することは仕方がない	20 代 (n=214)	15.4 %	84.6 %	100.0 %	2.943	0.400	
	30 代 (n=272)	12.5 %	87.5 %	100.0 %			
	40 代 (n=300)	15.0 %	85.0 %	100.0 %			
	50 代 (n=252)	17.9 %	82.1 %	100.0 %			
生死は最終的に本人の判断に任せるべきである	20 代 (n=214)	73.8 %	26.2 %	100.0 %	1.488	0.685	
	30 代 (n=272)	70.2 %	29.8 %	100.0 %			
	40 代 (n=300)	69.3 %	30.7 %	100.0 %			
	50 代 (n=252)	72.2 %	27.8 %	100.0 %			
自殺は絶対すべきではない	20 代 (n=214)	57.9 %	42.1 %	100.0 %	15.814	0.001	**
	30 代 (n=272)	72.1 %	27.9 %	100.0 %			
	40 代 (n=300)	70.0 %	30.0 %	100.0 %			
	50 代 (n=252)	73.4 %	26.6 %	100.0 %			

*** $p < 0.001$ ** $p < 0.01$ * $p < 0.05$ † $p < 0.1$

二〇代では57・9%と六割弱にとどまっている。逆にみれば、三〇代〜五〇代では三割程度が自殺に許容的であるが、二〇代では四割強が許容的であった、ということである。カイ二乗検定の結果、1%水準で有意な差であった。

この項目は、自殺に対する倫理的判断を直接に言語化した項目であるが、前項でみたように、性別でも有意な差が検出されている。他の項目がある種の条件づけをした設問であるのに対し、直接にたずねているわけであるが、この項目においてのみ性別、年代別ともに有意な差がみられたことは特筆して記録しておきたい。人々の自殺許容という態度を分析するにあたって、尺度化した分析とともに、この項目のみに特化した分析も試みられてよい可能性がある。

4 性別・年代別にみた自殺許容度

性別かつ年代別のクロス集計を行った。前項までと同様に、回答を二値化して分析に用いた。クロス集計結果を以下の表3-4に示した。

五項目中三項目において、有意な差がみられた。

「病気を善にした自殺は理解できる」という項目において、肯定的な回答はおおむね55%から65%の間で分布しているが、二〇代男性のみが77・1%と突出して高い。5%水準で有意な差がみられた。

「どうしようもない困難にあった人は、自殺をしてもやむをえない」という項目では、肯定的な回答が二〇代男性で59・6%と高い。逆に、五〇代女性で37・3%、四〇代男性で37・7%と低くなっている。5%水準で有意な差がみられた。

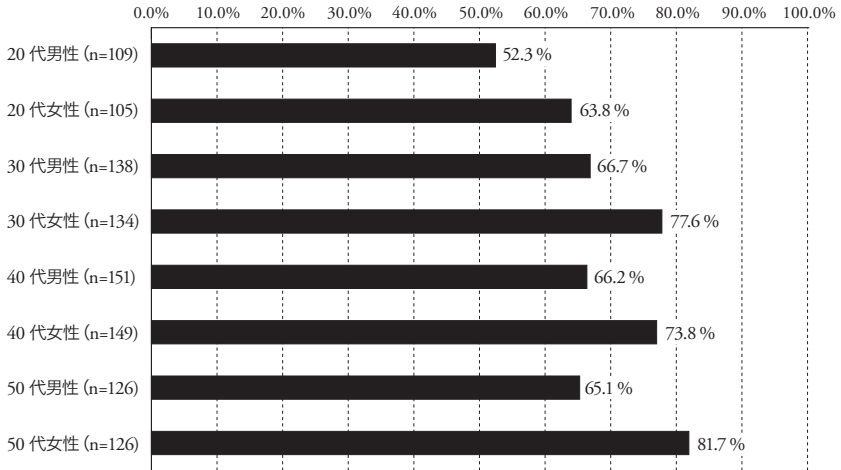
「自殺は絶対すべきではない」という項目では、肯定的な回答が二〇代男性で52・3%と最も低かつ

表 3-4 性別・年代別にみた自殺許容度

		そう思う	そう思わ ない	合計	χ^2 値	p 値	
病気を苦にした自殺は 理解できる	20 代男性 (n=109)	77.1 %	22.9 %	100.0 %	15.694	0.028	*
	20 代女性 (n=105)	59.0 %	41.0 %	100.0 %			
	30 代男性 (n=138)	65.2 %	34.8 %	100.0 %			
	30 代女性 (n=134)	64.2 %	35.8 %	100.0 %			
	40 代男性 (n=151)	57.6 %	42.4 %	100.0 %			
	40 代女性 (n=149)	63.8 %	36.2 %	100.0 %			
	50 代男性 (n=126)	65.9 %	34.1 %	100.0 %			
どうしようもない困難 にあった人は、自殺を してもやむをえないとき もある	50 代女性 (n=126)	55.6 %	44.4 %	100.0 %	17.367	0.015	*
	20 代男性 (n=109)	59.6 %	40.4 %	100.0 %			
	20 代女性 (n=105)	48.6 %	51.4 %	100.0 %			
	30 代男性 (n=138)	50.0 %	50.0 %	100.0 %			
	30 代女性 (n=134)	45.5 %	54.5 %	100.0 %			
	40 代男性 (n=151)	37.7 %	62.3 %	100.0 %			
	40 代女性 (n=149)	47.0 %	53.0 %	100.0 %			
責任をとって自殺する ことは仕方がない	50 代男性 (n=126)	46.0 %	54.0 %	100.0 %	11.986	0.101	
	50 代女性 (n=126)	37.3 %	62.7 %	100.0 %			
	20 代男性 (n=109)	22.0 %	78.0 %	100.0 %			
	20 代女性 (n=105)	8.6 %	91.4 %	100.0 %			
	30 代男性 (n=138)	12.3 %	87.7 %	100.0 %			
	30 代女性 (n=134)	12.7 %	87.3 %	100.0 %			
	40 代男性 (n=151)	13.2 %	86.8 %	100.0 %			
生死は最終的に本人 の判断に任せるべきで ある	40 代女性 (n=149)	16.8 %	83.2 %	100.0 %	6.616	0.470	
	50 代男性 (n=126)	19.8 %	80.2 %	100.0 %			
	50 代女性 (n=126)	15.9 %	84.1 %	100.0 %			
	20 代男性 (n=109)	77.1 %	22.9 %	100.0 %			
	20 代女性 (n=105)	70.5 %	29.5 %	100.0 %			
	30 代男性 (n=138)	73.2 %	26.8 %	100.0 %			
	30 代女性 (n=134)	67.2 %	32.8 %	100.0 %			
自殺は絶対すべきでは ない	40 代男性 (n=151)	69.5 %	30.5 %	100.0 %	33.108	0.000	***
	40 代女性 (n=149)	69.1 %	30.9 %	100.0 %			
	50 代男性 (n=126)	77.0 %	23.0 %	100.0 %			
	50 代女性 (n=126)	67.5 %	32.5 %	100.0 %			
	20 代男性 (n=109)	52.3 %	47.7 %	100.0 %			
	20 代女性 (n=105)	63.8 %	36.2 %	100.0 %			
	30 代男性 (n=138)	66.7 %	33.3 %	100.0 %			
30 代女性 (n=134)	77.6 %	22.4 %	100.0 %				
40 代男性 (n=151)	66.2 %	33.8 %	100.0 %				
40 代女性 (n=149)	73.8 %	26.2 %	100.0 %				
50 代男性 (n=126)	65.1 %	34.9 %	100.0 %				
50 代女性 (n=126)	81.7 %	18.3 %	100.0 %				

*** $p < 0.001$ ** $p < 0.01$ * $p < 0.05$ † $p < 0.1$

図 3-1 「自殺は絶対すべきでない」という設問への肯定的な回答の構成比



た。他方、五〇代女性では81・7%と最も高かった。0・1%水準で有意な差がみられた。

以上の三項目をとおして、二〇代男性が最も自殺に對して許容的であった。

なお、最後の項目に関してのみ、回答の構成比を視覚的に把握できるようにするために、「自殺は絶対すべきではない」という設問への肯定的な回答の構成比を図3-1に示した。

5 自殺許容度を尺度化した分析

自殺許容度を測定する五項目を用いて、自殺許容尺度を構成した。

「病気を苦にした自殺は理解できる」「どうしようもない困難にあった人は、自殺をしてもやむをえないときもある」「責任をとって自殺することは仕方がない」「生死は最終的に本人の判断に任せるべきである」の四項目につき、得点を逆転させて「とてもそう思う」四点、「全くそう思わない」一点とした。「自殺は絶対すべきではない」についてはそのまま「とてもそう

図 3-2 自殺許容尺度の得点分布

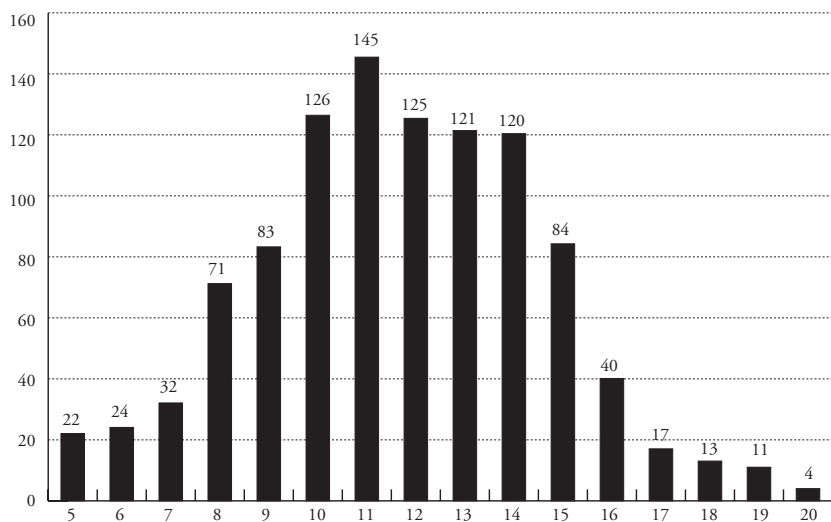


表 3-5 自殺許容尺度の分布

尺度得点	度数	構成比	累積構成比
5	22	2.1	2.1
6	24	2.3	4.4
7	32	3.1	7.5
8	71	6.8	14.4
9	83	8.0	22.4
10	126	12.1	34.5
11	145	14.0	48.5
12	125	12.0	60.5
13	121	11.7	72.2
14	120	11.6	83.7
15	84	8.1	91.8
16	40	3.9	95.7
17	17	1.6	97.3
18	13	1.3	98.6
19	11	1.1	99.6
20	4	0.4	100.0
合計	1038	100.0	

思う」一点を「全くそう思わない」四点とした。すなわち、得点が高いほど自殺許容度が高いということになる。得点分布を図 3-2、表 3-5 に示した。

これら五項目の信頼性係数は $\alpha = 0.71$ となった。また、これら五項目で因子分析（最尤法）を行ったところ、一因子構造におさまることを確認した。

以上の五項目の総和を算出し、自殺許容尺度とした。 $N=1038$ 、レンジは 5 ～ 20、平均 11.67 ± 2.92 、歪度 0.03、尖度 -0.14 となった。

①性別の比較

性別を独立変数とし、自殺許容尺度を従属変数とした平均の差の検定を行った。男性 ($n=524$) は平均 11.91 ± 3.05 、女性 ($n=514$) は平均値 11.42 ± 2.76 となった。 $F(1036)=2.65$ 、 $p=0.008$ となり、1%水準で有意な差であった。すなわち、男性の方が自殺許容度が高いということになる。

②年代別の比較

一〇歳刻みの年代を独立変数とし、自殺許容尺度を従属変数とした一元配置分散分析を行った。平均値と標準偏差 (SD) を表 3-16 に示した。

$F(3, 1034)=2.66$ 、 $p=0.047$ となり、5%水準で有意な差がみられた。Tukey の HSD 法で多重比較した結果、二〇代と四〇代の間に、5%水準で有意な差があった。

なお、表 3-16 からみてとれるように、年代と自殺許容尺度得点は直線的な関係になっていない。そのため、一歳刻みの年齢と自殺許容尺度との相関係数を算出すると、 $r=-0.07$ ($p=0.021$) と、ほとんど相関はみられない。性別に分析すると、男性 ($n=524$) では $r=0.08$ ($p=0.068$)、女性 ($n=514$) では $r=0.06$ ($p=0.155$) と有意ではない結果となった。

③性別、年代を独立変数とした重回帰分析

表 3-6 年代別の自殺許容尺度得点

	平均値	SD
20代 (n=214)	12.14	3.11
30代 (n=272)	11.62	2.83
40代 (n=300)	11.41	2.89
50代 (n=252)	11.64	2.85

表 3-7 自殺許容尺度の重回帰分析

	モデル 1		モデル 2	
	β	p 値	β	p 値
性別 (男性 =1、女性 =0)	0.08	0.008	0.07	0.021
20 代ダミー	0.07	0.069	0.03	0.476
30 代ダミー	0.00	0.922	-0.02	0.614
40 代ダミー	-0.04	0.353	-0.05	0.247
未婚 (未婚・離死別 =1、既婚 =0)			0.09	0.007
p 値	0.005		0.000	
R ² 値	0.014		0.021	
調査済み R ²	0.010		0.017	

自殺許容尺度を従属変数とした重回帰分析を行った。独立変数として性別と年代を投入した。なお、前項でみたように、年齢と自殺許容度は直線関係になっていないため、年齢をそのまま投入せずに、五〇代をベースとした一〇歳刻みのダミー変数を投入した。また、試行的に未婚の別を投入したモデルも作成した。解析結果を表 3-7 に示した。

モデル 1 は、性別と年代のみを投入したモデルである。モデルは有意ではあるが、調整済み決定係数が 0.010 とあてはまりは非常によくない。性別が男性であると、自殺を許容する方向で有意な結果となった。年代は二〇代において自殺を許容する方向で有意傾向であった。

モデル 2 は、性別と年代に加えて未婚の別を投入したモデルである。モデル 1 と同様に性別は有意な効果をもつが、年代は有意ではなくなる。未婚の別は 1% 水準で有意であり、 β の値も最も高い。未婚・離死別者は有意に自殺を許容する傾向にあるということである。となると、年代の効果にみえていたものは未婚・既婚であることによる効果である可能性があり、今後さらに詳細な検討が必要であろう。

なお、モデル 1 よりは上昇するが、モデル 2 の調整済み決

表 4-1 死生観・宗教観の回答による自殺許容度の差

設問	回答	割合	自殺許容度の平均値	2つの母平均の差の検定	
				有意確率	結果
死後も魂は残る	そう思う (n=511)	49.2 %	11.40	0.003	**
	そう思わない (n=527)	50.8 %	11.93		
生まれ変わりはある	そう思う (n=550)	53.0 %	11.44	0.006	**
	そう思わない (n=488)	47.0 %	11.93		
私は宗教を信じている	そう思う (n=176)	17.0 %	11.33	0.09	†
	そう思わない (n=862)	83.0 %	11.74		
自殺をした魂は苦しみつづける	そう思う (n=343)	33.0 %	11.23	0.001	**
	そう思わない (n=695)	67.0 %	11.88		

*** $p < 0.001$ ** $p < 0.01$ * $p < 0.05$ † $p < 0.1$

定係数は0.01」ときわめて低い。性別、年齢、未婚とといった基本的な属性のみによつては、自殺を許容する態度の説明力は乏しいということであり、別の要因を組み込んだモデル構築が求められる。(山本功)

四 死生観・宗教観と自殺許容

この章では、死生観・宗教観と自殺許容との関連を分析する。

1 死生観・宗教観と自殺許容

第三章で求めた自殺許容尺度を用いて、死生観・宗教観と自殺許容の関連を見ていく。死生観・宗教観を二値化したものを独立変数とし、自殺許容度を従属変数とした平均の差の検定(t 検定)の結果を、それぞれの質問項目ごとに表 4-1 示す。

いずれの項目でも、まず「等分散性のための Levene の検定」の有意確率を見た。その値がすべて 0.05 以上であったので等分散を仮定して、「そう思う」と「そう思わない」の自殺許容度の差を検定した。

その結果、「死後も魂は残る」「生まれ変わりはある」「自殺をした魂は苦しみつづける」と思う人は、そう思わない人よりも、自殺許容度が 1% 水準で有意に低いということが分かった。「私は宗教を信じている」

と思う人は、そう思わない人よりも、10%水準で有意に自殺許容度が低い傾向が見られた。以上のことから、死んだあと——自殺をしたあとも論理的に含む——何らかの形で意識や存在が残ると考える人の方が、自殺を許容しないということが言える。

ただし、「私は宗教を信じている」と「思う」人は一七六人、「思わない」人は八六二人と大きな差があることに気をつけなければならない。また宗教を信じる人は10%水準の有意傾向で信じていない人より自殺許容度が低い、他の項目、つまり死後の魂、生まれ変わり、自殺後の苦しみでは、1%水準で「思う」人の方が「思わない」人より自殺許容度が低い。

このような違いが出る理由としては、宗教を信じていない人のなかにも死後の魂や生まれ変わりを信じる人が相当数いて、自殺許容度をその分下げており、宗教的信仰の効果（この場合は宗教を信じていないことによる効果）を相対的に弱めているということが考えられる。宗教を信じる人の自殺許容度は11・33と十分に低いので、宗教的信仰の効果はそれなりにあると思われるからである。

2 宗教信仰の有無別に見た死生観と自殺許容

そこで、宗教を信じる人と信じない人に分けて、他の三つの死生観項目の自殺許容度を見ることとする。

いずれの項目でも、「等分散性のための Levene の検定」の有意確率がすべて0・05以上であったので、等分散を仮定して「そう思う」と「そう思わない」の自殺許容度の差を検定した。

結果は予測どおりであった。表4-1のとおり、宗教を信じている人のなかでも、「死後も魂は残る」と思う人と思わない人との間で自殺許容度に有意な差はなかった。同様に、「生まれ変わりはある」と思う人と思わない人との間でも、自殺許容度に有意な差はなかった。だが、「自殺をした魂は苦しみつづける」と思う人は、

表 4-2 宗教を信じる人 (n=176) における死生観の回答による自殺許容度の違い

設問	回答	割合	自殺許容度の 平均値	2つの母平均の差の検定	
				有意確率	結果
死後も魂は残る	そう思う (n=129)	73.3 %	11.30	0.798	NS
	そう思わない (n=47)	26.7 %	11.43		
生まれ変わりはある	そう思う (n=132)	75.0 %	11.33	0.977	NS
	そう思わない (n=44)	25.0 %	11.32		
自殺をした魂は苦しみつづける	そう思う (n=98)	55.7 %	10.91	0.036	*
	そう思わない (n=78)	44.3 %	11.86		

*** $p < 0.001$ ** $p < 0.01$ * $p < 0.05$ † $p < 0.1$

表 4-3 宗教を信じていない人 (n=862) における死生観の回答による自殺許容度の違い

設問	回答	割合	自殺許容度の 平均値	2つの母平均の差の検定	
				有意確率	結果
死後も魂は残る	そう思う (n=382)	44.3 %	11.43	0.006	**
	そう思わない (n=480)	55.7 %	11.98		
生まれ変わりはある	そう思う (n=418)	48.5 %	11.47	0.008	**
	そう思わない (n=444)	51.5 %	11.99		
自殺をした魂は苦しみつづける	そう思う (n=245)	28.4 %	11.36	0.017	*
	そう思わない (n=617)	71.6 %	11.89		

*** $p < 0.001$ ** $p < 0.01$ * $p < 0.05$ † $p < 0.1$

そう思わない人よりも自殺許容度が5%水準で有意に低かった。

表4-2にまとめたとように、宗教を信じていない人のなかでは、「死後も魂は残る」「生まれ変わりはある」「自殺をした魂は苦しみつづける」に関して、そう思う人はそう思わない人よりも、自殺許容度がそれぞれ1%水準、1%水準、5%水準で有意に低かった。このように、宗教を信じていなくても、死後、生、輪廻、自殺後の苦しみについての信念が、自殺許容度を低下させ、宗教信仰単独での自殺許容度低下の効果を相対的に弱めているのだろう。言い方を変えると、信仰者よりはるかに多い不信仰者の間でも、死後生等を信じているために自殺許容度の低い人がいるため、宗教信仰者の自殺許容度自体は低くても、その効果が若干見えにくくなるということである。

表 4-4 死生観・宗教観の各項目観の Pearson の相関係数

	死後も魂は残る	生まれ変わりはある	私は宗教を信じている	自殺をした魂は苦しみつづける
死後も魂は残る	1	.719**	.352**	.531**
生まれ変わりはある		1	.314**	.511**
私は宗教を信じている			1	.334**
自殺をした魂は苦しみつづける				1

** 相関係数は 1% 水準で有意 (両側)

3 それぞれの項目の関係

次に、死生観・宗教観に関する四項目相互の関連を見るために相関分析、一貫性があるかどうかの検討のために信頼性分析、そして四項目での因子分析を行った。

表 4-4 にまとめたとおり、四項目間の相関係数は、すべてプラスであり、いずれも 1% 水準で有意だった (すべて有意確率は両側で 0.000)。とくに高い相関が見られたのは「死後も魂は残る」と「生まれ変わりで」で「0.72」であった。この二つは、生まれ変わりを否定するキリスト教などの文脈では概念的に明確に区別されるものである。しかし、今回の調査ではほぼ同程度の肯定回答率であり、相関もかなり高いので、概念的に連続するものとしてとらえられていると見られる。また、「自殺をした魂は苦しみつづける」は、死後の魂とは「0.53」、生まれ変わりと「0.51」と、同程度の相関であった。この自殺後の魂の苦しみは、死後も魂が存続することを前提とする。もちろん、死後の魂を信じていても、自殺後の魂の苦しみをも信じるとは限らない。その分、相関係数も若干下がっているのだろう。さらに「宗教を信じている」は死後の魂とは「0.35」、生まれ変わりと「0.31」、自殺後の魂の苦しみとは「0.33」と、相対的に低かった。以上のことから、死生観の各項目間の相関に比べて、死生観と宗教観の相関は相

表 4-5 最尤法によって抽出された因子行列

	因子
	1
死後も魂は残る	.867
生まれ変わりはある	.824
自殺をした魂は苦しみつづける	.623
私は宗教を信じている	.411

4 自殺後苦難と自殺許容度

最後に、自殺許容度が低い順に設問への回答を並べ、これまでの結果を視覚的に確認しながら、関連づける。図 4-1 のように、自殺許容度が最も低いのは「自殺をした魂は苦しみつづける」と思う人で 11・23 であった。以降、死生観・宗教観への肯定回答者の自殺許容度が、否定回答者より全般的に低いということが分かる。両者の間に有意な差があることは、すでに表 4-1 で見たとおりである。図 4-1 では輪廻肯定の 11・44 と無信仰の 11・74 の間に大きな開きがあることが確認される。したがって、自殺許容度 11・5 未満であれば自殺許容度は低いと見なすことができ、11・7 以上であれば高いと見なすことができる。

すでに信仰の有無によって、死生観が自殺許容度に与える効果が変わることは、見てきたとおりである。そ

対的に低いと言える。これは、すでに見てきたように「私は宗教を信じている」の肯定・否定が、他の項目の肯定・否定と単純に結びついていないことを反映しているだろう。

クロンバックの信頼性係数は $\alpha = 0.78$ であつた。したがって、これら四項目の合計得点を算出して尺度化して利用することも許容される。最尤法による因子分析の結果は、一因子構造におさまった(表 4-5)。

しかし、四項目のなかで「私は宗教を信じている」だけが、因子負荷量が低く、異質な傾向にあることが分かる。その原因としては、これまで見てきたとおり、宗教を信じていなくても、死後の魂の存続や生まれ変わりを信じる人が一定数いるということに求められるだろう。

図 4-1 死生観・宗教観の回答と自殺許容度（低い順）

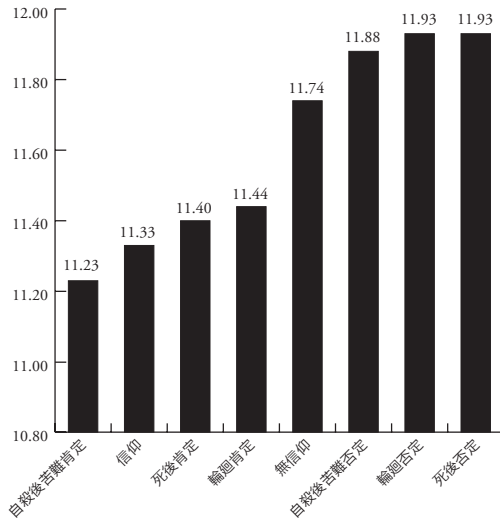
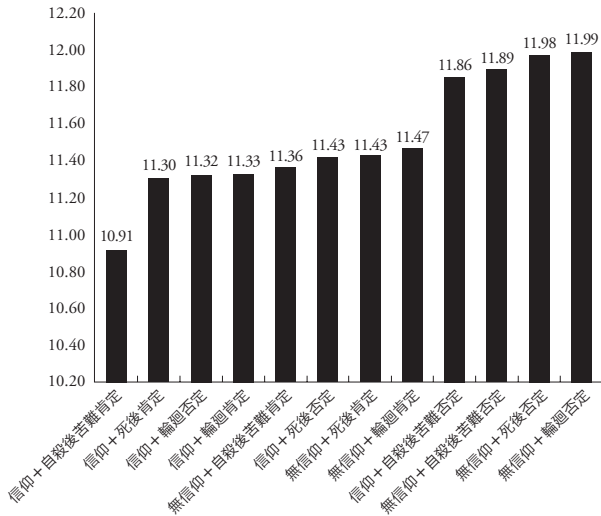


図 4-2 死生観・宗教観の回答（信仰の有無別）と自殺許容度（低い順）



ここで、信仰の有無と他の死生観項目を組み合わせた場合の自殺許容度を低い順に並べたのが図 4-1 である。信仰ありで自殺後苦難肯定の場合において、最も自殺許容度が低いことが確認される。また、表 4-1 にまとめたように、信仰ありで死後肯定と否定の間には自殺許容度に有意な差がなかった。同じく信仰ありで輪廻肯定と否定の間にも有意差はない。図 4-2 を見るとこれらは低い自殺許容度でかたまっており、その結果、

有意差が出なかったということが確認される。しかし、低い自殺許容度を示す群のなかには、無信仰だが、自殺後苦難、死後、輪廻を肯定する人々が入ってくる。これらの人々の自殺許容度は11・5未満なので、自殺許容度が低いと見なすことができる。

この低い群と高い群の間には大きなギャップがあり、信仰を持っていても自殺後の苦難を否定する人は11・86という高い自殺許容度である。これと無信仰で自殺後の苦難を否定する人の自殺許容度は大して変わらない。最も自殺許容度が高いのは、無信仰でかつ死後や輪廻を否定する人たちである。

全体として、自殺をした魂の苦しみが自殺許容度を下げる大きな要因であることが確認される。単独でも自殺許容度は低いし、信仰の有無にかかわらず、自殺許容度は低い。それに対して、自殺後の苦難を否定する人は、たとえ信仰を持っていても、自殺を許容する傾向が高い。

宗、教、信、仰、は、自、殺、許、容、度、を、下、げ、る、決、定、的、要、因、と、は、言、え、な、い。なぜなら、無信仰でも死後存続を肯定する人は自殺許容度が低いからである。逆に、信仰があつても自殺後苦難を否定する人は自殺許容度が高い。自殺後苦難の次に自殺許容度を下げるのは、死後と輪廻であることが分かる。生まれ変わりや死後の世界を肯定すると、この世の苦しみを逃れるために自殺をしやすくなるという説があるが、これは死後や輪廻を信じる人の自殺許容度が低いことから明確に否定されたと言えるだろう。

なお、ここで見た宗教観・死生観が自殺許容度に与える効果と、実際の自殺率を下げる効果とは同一視できないことには注意する必要がある。宗教重要視の度合いや信仰の割合と、実際の自殺率との関係が、単線的ではないことを、島蘭・堀江(2015)のなかで、堀江は世界の国別自殺率と日本国内の都道府県別の自殺率の検討から明らかにしている。(堀江宗正)

表 5-1 死生観・宗教観の回答による一般的信頼の差

設問	回答	割合	一般的信頼 尺度の点数	2つの母平均の差の検定	
				有意確率	結果
死後も魂は残る	そう思う (n=511)	49.2 %	12.49	0.002	**
	そう思わない (n=527)	50.8 %	11.95		
生まれ変わりはある	そう思う (n=550)	53.0 %	12.42	0.012	*
	そう思わない (n=488)	47.0 %	11.98		
私は宗教を信じている	そう思う (n=176)	17.0 %	13.07	0.000	***
	そう思わない (n=862)	83.0 %	12.04		
自殺をした魂は苦しみつづける	そう思う (n=343)	33.0 %	12.51	0.001	**
	そう思わない (n=695)	67.0 %	12.07		

*** $p < 0.001$ ** $p < 0.01$ * $p < 0.05$ † $p < 0.1$

五 死生観・宗教観と一般的信頼

この章では、死生観・宗教観と一般的信頼との関連を分析する。

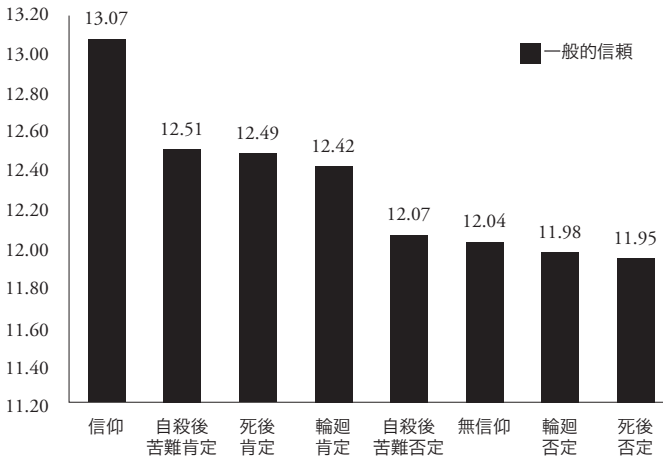
1 死生観・宗教観と一般的信頼

第二章で求めた一般的信頼尺度を用いて、死生観・宗教観と一般的信頼の関連を見ていく（なお一般的信頼と自殺許容の関連は第二章2節を参照）。死生観・宗教観を二値化したものを独立変数とし、一般的信頼を従属変数とした平均の差の検定（t検定）の結果を、それぞれの質問項目ごとに示す（表5-1）。

いずれの項目でも、まず「等分散性のためのLeveneの検定」の有意確率を見た。その値がすべて0.05以上であったので等分散を仮定して、「そう思う」と「そう思わない」の一般的信頼の差を検定した。

その結果、「私は宗教を信じている」と思う人は0.1%水準で、「死後も魂は残る」「自殺をした魂は苦しみつづける」と思う人は1%水準で、「生まれ変わりはある」と思う人は5%水準で、それぞれそう思わない人よりも、一般的信頼が有意に高いということが分かった。以上のことから、宗教を信じている人、死んだあと何らかの形で意識や存在が残ると考える人の方が、そうでない人よりも、一般的な社会的信頼が高い

図 5-1 死生観・宗教観の回答と一般的信頼（高い順）



ということが言える。

一般的信頼が高い順に設問への回答を並べたのが図5-1である。

「宗教を信じている」人の一般的信頼が他を引き離して高いことが分かる。次に、自殺後の苦難、死後、輪廻などを肯定する人が高く、逆にこれらの信念を否定する人が一般的信頼において低いことが分かる。(堀江宗正)

六 知見のまとめ

最後に本調査で得られた知見をまとめる。本調査のメインテーマは「自殺許容」である。これは裏を返せば「自殺禁止」である。日本人サンプルにおいて自殺に関する許容と禁止がどのような条件の下で変動するかを明らかにするのが本調査の目的であった。

まず、「自殺は絶対すべきではない」と無条件に答える人は七割弱であるということを確認する。逆に言えば、三割は自殺を許容する。とくに「病气」を苦にしている、「どうしようもない困難」に陥っている、「責任」をとる形であるな

どの条件をつけると、自殺許容度は上昇する（第三章1節）。性別では、男性の方が自殺を許容する回答が多い（第三章2節、第三章5節1）。また、年代が若い方が自殺を許容する回答が多い（第三章3節）。病苦、困難、無条件では二〇代男性が最も自殺に許容的である（第三章4節）。しかし、年代と自殺許容尺度得点は直線的な関係になっていない。二〇代と四〇代の間には有意差があり、二〇代は自殺許容度が高いという形である（第三章5節2）。この年代の効果は、未婚／既婚であることによる効果である可能性がある（第三章5節3）。

一方、本調査では他者一般への信頼が自殺許容／禁止と関係があるのではないかという想定の下、一般的信頼尺度と自殺許容についても調べた。その結果、すべての性別かつ年代別において、高信頼群の方が「自殺は絶対すべきではない」という回答が多かった。

また、宗教観・死生観との関連も精査した。結果として、死後、何らかの形で意識や存在が残る（死後存続）と考える人の方が自殺許容度は低かった。少なくとも、死後存続を信じると自殺が助長されるという俗説は当たらない。宗教を信じることの効果はそれに比べると強くないが、宗教を信じる人の自殺許容度は十分に低いことが分かった（第四章1節）。

このような結果が出たのは、日本人の場合、宗教を信じていなくても、死後存続を信じている人が存在することによる。死生観の各項目間の相関に比べて、死生観と宗教観の相関は相対的に低かった（第四章3節）。宗教を信じることと死後存続を信じるとは必ずしも一致しないとまとめられる。死後生、輪廻、自殺後の苦しみについて信じていることで、自殺許容度が低下し、宗教を信じること単独での自殺許容度低減効果を相対的に弱めている（第四章2節）。

「自殺をした魂は苦しみつづける」という信念（自殺後苦難）は、自殺許容度を下げる大きな要因である。一方、宗教信仰は自殺許容度を下げる決定的要因とはなっていない。無信仰でも死後存続を肯定する人は自殺

許容度が低く、信仰があつても自殺後苦難を否定する人は自殺許容度が高かつた(第四章4節)。

最後に、宗教観・死生観と一般的信頼の関連を確かめた。その結果、宗教を信じている人、死んだあと何らかの形で意識や存在が残ると考える人の方が、そうでない人よりも一般的な社会的信頼が高いことが分かつた(第五章1節)。ここでは宗教を信じることの効果が最も高かつた。

結論として、宗教を信じることと自殺を容認しないこととの間には若干の複雑な関係も見られるが、死後存続を信じること、とくに自殺した魂が苦しみつづけるという観念と、自殺を許容しないこと、他者一般への信頼の高さとの間には関連があることが分かつた。

本調査は、調査報告にとどめ、これらの知見の理論的な意味や、自殺対策上の実践的意義についてはこれ以上論じない。理論的な問題として、死生観と社会的信頼が自殺観と関わる理由、自殺と個人主義および集団主義との関連などは、別途論じなければならない。また、実践的な問題として、自殺後苦難が自殺に向かうことへの一定の歯止めになることを確認したからと言って、自殺対策に取り組む宗教者がこの信念を人々に植え付けることが実際に自殺率を下げるのに有効だと考えるべきではないだろう。なぜなら、この考えは自殺をタブー視する風潮を助長して、遺族を苦しめていることが、実際の対策の活動の場面の問題になつているからである。そもそも、こうした質問紙調査で確かめられる自殺許容・自殺禁止と、実際の自殺率の高低は別の問題である。

今後、以上のような論点への研究が、本調査の知見を土台として、さらに深まることが期待される。(堀江宗正)

死生観に関するアンケート

.....

このアンケートは、政府がすすめている自殺総合対策大綱の見直しを踏まえた自殺対策発展のための学術研究の一環として一般市民の皆さまにおたずねするものです。

アンケートの目的は、自殺に関する一般市民の感じ方、考え方をおたずねし、統計的に分析することによって、政府や自治体の自殺対策に貢献する基礎的な資料とすることにあります。

このアンケートは自殺に関連することをおたずねしますので、衝撃をうけたり、つらい思いや不愉快な思いを抱く可能性があります。

ご回答いただきます前に、あらかじめこのことについてお伝えいたします。

回答はすべて統計的に処理いたしますので、個人が特定されることは決してございません。
以上のことをおことわりしたうえで、調査へのご協力をお願いいたします。

.....

当アンケートの回答者の皆様へお願い

マクロミルモニタの皆様にはモニタ規約にて「調査についての守秘義務」の徹底をお願いしています。
当アンケートの内容および当アンケートで知り得た情報については、決して第三者に口外しないよう（掲示板やホームページへの書き込みを含む）、ご協力をお願いします。

Q5

毎年3月は、「自殺対策強化月間」として、国、地方公共団体、関係団体及び民間団体等が連携して啓発活動を推進し、悩みを抱えた人が必要な支援を受けられるよう支援策が重点的に実施されることとなっています。あなたは、このことを知っていましたか。

【必須入力】

- 1. 知っている
- 2. 聞いたことはある
- 3. 知らない



ここで改ページ

Q6

毎年9月10日からの一週間は「自殺予防週間」として、国、地方公共団体、関係団体及び民間団体等が連携して啓発活動を推進し、悩みを抱えた人が必要な支援を受けられるよう支援策が重点的に実施されることとなっています。あなたは、このことを知っていましたか。

【必須入力】

- 1. 知っている
- 2. 聞いたことはある
- 3. 知らない



ここで改ページ

Q7

自殺対策の「ゲートキーパー」とは、悩んでいる人に気づき、声をかけ、話を聞いて、必要な支援につなげ、見守る人のことです。ゲートキーパーの役割は、心理社会的問題や生活上の問題、健康上の問題を抱えている人や、自殺の危険を抱えた人々に気づき適切にかかわることです。自殺総合対策大綱の中でも、「ゲートキーパー」養成が目標に掲げられています。あなたは、このゲートキーパーについて知っていましたか。

【必須入力】

- 1. 知っている
- 2. 聞いたことはある
- 3. 知らない



ここで改ページ

Q8

この 10 年くらいの間に、あなたの周りで自殺をした方はいらっしゃいましたか。

【必須入力】

- 1. いた
- 2. いない
- 3. 答えたくない



ここで改ページ

Q9

あなたは、これまでの人生のなかで、本気で自殺したいと考えたことがありますか。

【必須入力】

- 1. 自殺したいと思ったことがない
- 2. 自殺したいと思ったことがある
- 3. 答えたくない



ここで改ページ

【次に、あなたがお住まいの地域のことについてお伺いします。】

Q10

あなたは、現在お住まいの地域にどれくらい住んでいますか。

【必須入力】

- 1. 1年未満
- 2. 1年以上5年未満
- 3. 5年以上10年未満
- 4. 10年以上20年未満
- 5. 20年以上

Q14 あなたは、お住まいの地域でスポーツ団体・文化芸術団体・ボランティア団体などの、自主的な団体の活動に参加していますか。
【必須入力】

- 1. 積極的に参加している
- 2. ときどき参加している
- 3. ほとんど参加していない
- 4. 加入していない



Q15 あなたはふだんの生活で次のようなことがありますか。
【必須入力】

	1 たくさんある	2 ある程度ある	3 あまりない	4 ほとんどない
1. 近所の人と雑談や世間話をする事 →	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
2. 近所の人との頼みごとや頼まれごと →	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>



Q16 この一か月ぐらいの間で、以下のようなことがありましたか。
【必須入力】

	1 い っ も	2 た い て い	3 と き ど き	4 少 し だ け	5 全 く な い
1. 気分が沈み込んで、何が起ころとも気が晴れないように感じた →	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
2. 何をするのも骨折りだと感じた →	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
3. そわそわ、落ち着かなく感じた →	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
4. 神経過敏に感じた →	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
5. 自分は価値のない人間だと感じた →	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>



Q17 あなたは結婚していらっしゃいますか。
【必須入力】

- 1. 未婚
- 2. 既婚（現在、配偶者がいる）
- 3. 既婚の経験あり（離・死別）



Q18 現在、あなたと一緒に住まいのご家族は、あなたを含めて何人ですか。
※一人暮らしの方は1人になります。
【必須入力】

自分も含めて 人（半角数字）



Q19 今住まいの住宅の形態は、次のどれにあてはまりますか。
【必須入力】

- 1. 持ち家
- 2. 公共（公営）の賃貸住宅
- 3. 民間（民営）の賃貸住宅
- 4. その他



Q20 今住まいの住宅の建て方は、次のどれにあてはまりますか。
【必須入力】

- 1. 一戸建て
- 2. 集合住宅
- 3. その他



ここで改ページ

Q21

あなたが最後に出られた学校(在学中も含みます)についてお聞きします。あてはまるもの1つを選んでください。

【必須入力】

- 1. 中学校
- 2. 高等学校
- 3. 専門学校
- 4. 短期大学・高等専門学校
- 5. 大学・大学院
- 6. その他



ここで改ページ

Q22

あなたの職業はどれにあたりますか。1～16の番号の中からあてはまるもの1つをお選びください。

【必須入力】

【自営業・家族従業者の方】

- 1. 自営業・家族従業者(農林漁業、工業、加工製造業など)
- 2. 自営業・家族従業者(商業・サービス業など)
- 3. 自営業・家事従業者その他
- 4. 自由業

【常勤でお勤めの方(正社員、派遣社員、契約社員等)】

- 5. 経営・管理職
- 6. 専門職、教育職
- 7. 事務的職業
- 8. 生産・技能職
- 9. 営業・販売・サービス業
- 10. 常勤のその他職業

【その他の方】

- 11. 専業主婦(主夫)
- 12. 学生
- 13. フリーター、パートタイマー(週20時間以上勤務)
- 14. 無職
- 15. 年金生活
- 16. その他



Q23

あなたの住んでいる市区町村は、以下のどれにあてはまりますか。

【必須入力】

- 1. 東京 23 区・政令指定都市
- 2. 上記以外の人口 20 万人以上の市
- 3. 上記以外の人口 10 万人以上 20 万人未満の市
- 4. 上記以外の人口 10 万人未満の市
- 5. 町村

アンケートは以上で終わりです。ご協力ありがとうございました。
回答もれがないか確認し、よろしければ「送信」ボタンをクリックしてください。

基礎集計表

[TABLE001]

SEX	性別 単一回答	N	%
1	男性	524	50.5
2	女性	514	49.5
	全体	1038	100

[TABLE002]

AGEID	年齢 単一回答	N	%
1	12才未満	0	0
2	12才～19才	0	0
3	20才～24才	102	9.8
4	25才～29才	112	10.8
5	30才～34才	124	11.9
6	35才～39才	148	14.3
7	40才～44才	160	15.4
8	45才～49才	140	13.5
9	50才～54才	126	12.1
10	55才～59才	126	12.1
11	60才以上	0	0
	全体	1038	100

[TABLE003]

PREFECTURE	都道府県 単一回答	N	%
1	北海道	66	6.4
2	青森県	10	1
3	岩手県	7	0.7
4	宮城県	21	2
5	秋田県	7	0.7
6	山形県	5	0.5
7	福島県	14	1.3
8	茨城県	17	1.6
9	栃木県	12	1.2
10	群馬県	11	1.1
11	埼玉県	72	6.9
12	千葉県	43	4.1
13	東京都	156	15
14	神奈川県	79	7.6
15	新潟県	26	2.5
16	富山県	2	0.2
17	石川県	9	0.9
18	福井県	4	0.4
19	山梨県	5	0.5
20	長野県	8	0.8
21	岐阜県	13	1.3
22	静岡県	20	1.9
23	愛知県	53	5.1

24	三重県	14	1.3
25	滋賀県	11	1.1
26	京都府	19	1.8
27	大阪府	82	7.9
28	兵庫県	57	5.5
29	奈良県	16	1.5
30	和歌山県	9	0.9
31	鳥取県	4	0.4
32	島根県	6	0.6
33	岡山県	12	1.2
34	広島県	22	2.1
35	山口県	3	0.3
36	徳島県	4	0.4
37	香川県	6	0.6
38	愛媛県	13	1.3
39	高知県	2	0.2
40	福岡県	47	4.5
41	佐賀県	2	0.2
42	長崎県	10	1
43	熊本県	13	1.3
44	大分県	4	0.4
45	宮崎県	7	0.7
46	鹿児島県	7	0.7
47	沖縄県	8	0.8
	全体	1038	100

[TABLE004]

AREA	地域 単一回答	N	%
1	北海道	66	6.4
2	東北地方	64	6.2
3	関東地方	390	37.6
4	中部地方	154	14.8
5	近畿地方	194	18.7
6	中国地方	47	4.5
7	四国地方	25	2.4
8	九州地方	98	9.4
	全体	1038	100

[TABLE005]

JOB	職業 単一回答	N	%
1	公務員	40	3.9
2	経営者・役員	12	1.2
3	会社員(事務系)	147	14.2
4	会社員(技術系)	132	12.7
5	会社員(その他)	147	14.2
6	自営業	53	5.1
7	自由業	14	1.3
8	専業主婦(主夫)	184	17.7
9	パート・アルバイト	153	14.7
10	学生	60	5.8
11	その他	51	4.9
12	無職	45	4.3
	全体	1038	100

[TABLE006]

CELL	割付セル 単一回答	N	%
1	【男性】 20-24 歳	52	5
2	【男性】 25-29 歳	57	5.5
3	【男性】 30-34 歳	63	6.1
4	【男性】 35-39 歳	75	7.2
5	【男性】 40-44 歳	81	7.8
6	【男性】 45-49 歳	70	6.7
7	【男性】 50-54 歳	63	6.1
8	【男性】 55-59 歳	63	6.1
9	【女性】 20-24 歳	50	4.8
10	【女性】 25-29 歳	55	5.3
11	【女性】 30-34 歳	61	5.9
12	【女性】 35-39 歳	73	7
13	【女性】 40-44 歳	79	7.6
14	【女性】 45-49 歳	70	6.7
15	【女性】 50-54 歳	63	6.1
16	【女性】 55-59 歳	63	6.1
	全体	1038	100

[TABLE007]

Q1	あなたは、次の意見についてどのようにお考えでしょうか。(1)～(9)のそれぞれについて、最もあてはまるものをひとつお選びください。 単一回答	全体	1	2	3	4
			とても そう 思う	やや そう 思う	あまり そう 思わ ない	全く そう 思わ ない
1	隣近所の問題は自分たちで解決できる	1038 100	43 4.1	472 45.5	451 43.4	72 6.9
2	ほとんどの隣近所の人は信頼できる	1038 100	30 2.9	444 42.8	458 44.1	106 10.2
3	いざというときには隣近所の人たちと助け合うことができる	1038 100	54 5.2	556 53.6	341 32.9	87 8.4
4	住んでいる地域に愛着がある	1038 100	134 12.9	526 50.7	281 27.1	97 9.3
5	ほとんどの人は信頼できる	1038 100	22 2.1	411 39.6	498 48	107 10.3
6	ほとんどの人は基本的に正直である	1038 100	20 1.9	453 43.6	444 42.8	121 11.7
7	ほとんどの人は他人を信頼している	1038 100	17 1.6	360 34.7	564 54.3	97 9.3
8	たいいてい人は、人から信頼された場合、同じようにその相手を信頼する	1038 100	60 5.8	656 63.2	274 26.4	48 4.6
9	ほとんどの人は基本的に善良で親切である	1038 100	35 3.4	562 54.1	364 35.1	77 7.4

[TABLE008]

Q2	死生観に関することについておたずねします。あなたは、次の意見についてどのようにお考えでしょうか。(1)～(5)のそれぞれについて、最もあてはまるものをひとつお選びください。 単一回答	全体	1	2	3	4
			とてもそう思う	ややそう思う	あまりそう思わない	全くそう思わない
1	死後も魂は残る	1038 100	107 10.3	404 38.9	357 34.4	170 16.4
2	生まれ変わりはある	1038 100	136 13.1	414 39.9	311 30	177 17.1
3	私は宗教を信じている	1038 100	39 3.8	137 13.2	448 43.2	414 39.9
4	自殺をした魂は苦しみつづける	1038 100	65 6.3	278 26.8	449 43.3	246 23.7
5	治る見込みがないのなら延命治療はしてもらいたくない	1038 100	402 38.7	453 43.6	147 14.2	36 3.5

[TABLE009]

Q3	自殺に関することについておたずねします。あなたは、次の意見についてどのようにお考えでしょうか。(1)～(5)のそれぞれについて、最もあてはまるものをひとつお選びください。 単一回答	全体	1	2	3	4
			とてもそう思う	ややそう思う	あまりそう思わない	全くそう思わない
1	病気を苦にした自殺は理解できる	1038 100.0	89 8.6	568 54.7	292 28.1	89 8.6
2	どうしようもない困難にあった人は、自殺をしてもやむをえないときもある	1038 100.0	77 7.4	401 38.6	406 39.1	154 14.8
3	責任をとって自殺することは仕方がない	1038 100.0	20 1.9	137 13.2	456 43.9	425 40.9
4	生死は最終的に本人の判断に任せるべきである	1038 100.0	211 20.3	528 50.9	230 22.2	69 6.6
5	自殺は絶対すべきではない	1038 100.0	338 32.6	377 36.3	266 25.6	57 5.5

[TABLE010]

Q4	自殺対策は社会的な取組みとして実施する必要があると思いますか。あなたのお考えに近いものをひとつ選んで下さい。 単一回答	N		%	
		必要がある	必要がない		
1	必要がある	330		31.8	
2	どちらかといえば必要がある	563		54.2	
3	どちらかといえば必要ない	118		11.4	
4	必要ない	27		2.6	
	全体	1038		100.0	

[TABLE011]

Q5	毎年3月は、「自殺対策強化月間」として、国、地方公共団体、関係団体及び民間団体等が連携して啓発活動を推進し、悩みを抱えた人が必要な支援を受けられるよう支援策が重点的に実施されることとなっています。あなたは、このことを知っていましたか。 単一回答	N	%
1	知っている	84	8.1
2	聞いたことはある	291	28.0
3	知らない	663	63.9
	全体	1038	100.0

[TABLE012]

Q6	毎年9月10日からの一週間は「自殺予防週間」として、国、地方公共団体、関係団体及び民間団体等が連携して啓発活動を推進し、悩みを抱えた人が必要な支援を受けられるよう支援策が重点的に実施されることとなっています。あなたは、このことを知っていましたか。 単一回答	N	%
1	知っている	51	4.9
2	聞いたことはある	230	22.2
3	知らない	757	72.9
	全体	1038	100.0

[TABLE013]

Q7	自殺対策の「ゲートキーパー」とは、悩んでいる人に気づき、声をかけ、話を聞いて、必要な支援につなげ、見守る人のことです。ゲートキーパーの役割は、心理社会的問題や生活上の問題、健康上の問題を抱えている人や、自殺の危険を抱えた人々に気づき適切にかかわることです。自殺総合対策大綱の中でも、「ゲートキーパー」養成が目標に掲げられています。あなたは、このゲートキーパーについて知っていましたか。 単一回答	N	%
1	知っている	69	6.6
2	聞いたことはある	238	22.9
3	知らない	731	70.4
	全体	1038	100.0

[TABLE014]

Q8	この10年くらいの間に、あなたの周りで自殺をした方はいらっしゃいましたか。 単一回答	N	%
1	いた	244	23.5
2	いない	759	73.1
3	答えたくない	35	3.4
	全体	1038	100.0

[TABLE015]

Q9	あなたは、これまでの人生のなかで、本気で自殺したいと考えたことがありますか。 単一回答	N	%
1	自殺したいと思っただけ	565	54.4
2	自殺したいと思っただけ	403	38.8
3	答えたくない	70	6.7
	全体	1038	100.0

[TABLE016]

Q10	あなたは、現在お住まいの地域にどれくらい住んでいますか。 単一回答	N	%
1	1年未満	59	5.7
2	1年以上5年未満	194	18.7
3	5年以上10年未満	163	15.7
4	10年以上20年未満	224	21.6
5	20年以上	398	38.3
	全体	1038	100.0

[TABLE017]

Q11	あなたは、ご近所に、お互いに相談したり助け合ったりしている人がいますか。 単一回答	N	%
1	たくさんいる	22	2.1
2	ある程度いる	316	30.4
3	あまりいない	362	34.9
4	ほとんどいない	338	32.6
	全体	1038	100.0

[TABLE018]

Q12	あなたは、近所の小・中学生がどこの家の子どもか知っていますか。 単一回答	N	%
1	ほとんど知っている	22	2.1
2	だいたい知っている	204	19.7
3	あまり知らない	316	30.4
4	ほとんど知らない	496	47.8
	全体	1038	100.0

[TABLE019]

Q13	あなた自身や同居の家族は、町内会・自治会等にどの程度参加していますか。 単一回答	N	%
1	行事などにも積極的に参加している	84	8.1
2	ときどき参加している	286	27.6
3	ほとんど参加していない(会費を払っているだけ)	339	32.7
4	加入していない	329	31.7
	全体	1038	100.0

[TABLE020]

Q14	あなたは、お住まいの地域でスポーツ団体・文化芸術団体・ボランティア団体などの、自主的な団体の活動に参加していますか。 単一回答	N	%
1	積極的に参加している	19	1.8
2	ときどき参加している	118	11.4
3	ほとんど参加していない	290	27.9
4	加入していない	611	58.9
	全体	1038	100.0

[TABLE021]

Q15	あなたはふだんの生活で次のようなことがありますか。 単一回答	全体	1	2	3	4
			たくさんある	ある程度ある	あまりない	ほとんどない
1	近所の人と雑談や世間話をする	1038 100.0	29 2.8	289 27.8	309 29.8	411 39.6
2	近所の人との頼みごとや頼まれごと	1038 100.0	11 1.1	143 13.8	338 32.6	546 52.6

[TABLE022]

Q16	この一か月くらいの中で、以下のようなことがありましたか。 単一回答	全体	1	2	3	4	5
			いつも	たいてい	ときどき	少しだけ	全くない
1	気分が沈み込んで、何か起こっても気が晴れないように感じた	1038 100.0	45 4.3	116 11.2	313 30.2	288 27.7	276 26.6
2	何をするのも骨折りと感じた	1038 100.0	38 3.7	102 9.8	285 27.5	286 27.6	327 31.5
3	そわそわ、落ち着かなく感じた	1038 100.0	31 3.0	63 6.1	231 22.3	293 28.2	420 40.5
4	神経過敏に感じた	1038 100.0	50 4.8	87 8.4	224 21.6	242 23.3	435 41.9
5	自分は価値のない人間だと感じた	1038 100.0	56 5.4	80 7.7	225 21.7	200 19.3	477 46.0

[TABLE023]

Q17	あなたは結婚していらっしゃいますか。 単一回答	N	%
1	未婚	383	36.9
2	既婚（現在、配偶者がいる）	583	56.2
3	既婚の経験あり（離・死別）	72	6.9
	全体	1038	100.0

[TABLE024]

Q18	現在、あなたと一緒に住まいのご家族は、あなたを含めて何人ですか。 ※一人暮らしの方は1人になります。	N	%
1	1人	166	16.0
2	2人	234	22.5
3	3人	277	26.7
4	4人	238	22.9
5	5人	85	8.2
6	6人	24	2.3
7	7人	10	1.0
8	8人	3	0.3
9	9人	1	0.1
	全体	1038	100

[TABLE025]

Q19	今住まいの住宅の形態は、次のどれにあてはまりますか。 単一回答	N	%
1	持ち家	662	63.8
2	公共（公営）の賃貸住宅	49	4.7
3	民間（民営）の賃貸住宅	310	29.9
4	その他【 】	17	1.6
	全体	1038	100.0

[TABLE026]

Q20	今住まいの住宅の建て方は、次のどれにあてはまりますか。 単一回答	N	%
1	一戸建て	538	51.8
2	集合住宅	494	47.6
3	その他【 】	6	0.6
	全体	1038	100.0

[TABLE027]

Q21	あなたが最後に出られた学校（在学中も含みます）についてお聞きします。あてはまるもの1つを選んでください。 単一回答	N	%
1	中学校	28	2.7
2	高等学校	247	23.8
3	専門学校	126	12.1
4	短期大学・高等専門学校	152	14.6
5	大学・大学院	481	46.3
6	その他【 】	4	0.4
	全体	1038	100.0

[TABLE028]

Q22	あなたの職業はどれにあたりますか。1～16の番号の中からあてはまるもの1つをお選びください。 単一回答	N	%
1	自営業・家族従業者（農林漁業、工業、加工製造業など）	11	1.1
2	自営業・家族従業者（商業・サービス業など）	50	4.8
3	自営業・家事従業者その他【 】	6	0.6
4	自由業	10	1.0
5	経営・管理職	47	4.5
6	専門職、教育職	87	8.4
7	事務的職業	146	14.1
8	生産・技能職	80	7.7
9	営業・販売・サービス業	133	12.8
10	常勤のその他職業【 】	15	1.4
11	専業主婦（主夫）	186	17.9
12	学生	56	5.4
13	フリーター、パートタイマー（週20時間以上勤務）	136	13.1
14	無職	60	5.8
15	年金生活	2	0.2
16	その他【 】	13	1.3
	全体	1038	100.0

[TABLE029]

Q23	あなたの住んでいる市区町村は、以下のどれにあてはまりますか。 単一回答	N	%
1	東京23区・政令指定都市	283	27.3
2	上記以外の人口20万人以上の市	268	25.8
3	上記以外の人口10万人以上20万人未満の市	198	19.1
4	上記以外の人口10万人未満の市	197	19.0
5	町村	92	8.9
	全体	1038	100.0

■註

1 本調査は平成二五年度厚生労働科学特別研究事業「自殺総合対策大綱の見直しを踏まえた自殺対策委発展のための国際的・学際的検討」(H25 特別・指定 022) (研究代表者・椿広計(統計数理研究所))の一環として実施された。本調査の調査主体は山本功(淑徳大学)と堀江宗正(東京大学)である。実査は、株式会社マクロミルに委託した。

■文献

島蘭進・堀江宗正、二〇二五。「宗教は自殺予防に資するのか——日本人と自殺」、『精神科治療学』三〇(三)号、三八七～三九二頁。

内閣府自殺対策推進室「平成二〇年度自殺対策に関する意識調査」(二〇〇八年二～三月)、http://www8.cao.go.jp/jisatsutaisaku/survey/report_h23/index.html

内閣府自殺対策推進室「平成二三年度自殺対策に関する意識調査」(二〇二二年一月)、http://www8.cao.go.jp/jisatsutaisaku/survey/report_h23/index.html

山岸俊男、一九九八。『信頼の構造——こころと社会の進化ゲーム』東京大学出版会。

(やまもと・いさお 淑徳大学コミュニティ政策学部教授)

(ほりえ・のりちか 東京大学大学院人文社会科学系研究科死生学・応用倫理センター准教授)